

バルザックの小説

——「セザール・ピロトオ」の場合——

田 村 俣

級のうちに含まれた種々の争いと矛盾をえぐつたのである。

「人間喜劇」という総題のついたバルザックの一連の小説作品には、農民から貴族にいたるあらゆる社会階層が登場している。なかでも、支配的な役割をになつて活躍するのはブルジョア階級であつて、この階級の優越性は、貴族階級の衰退とからみあい、平行している。「人間喜劇」の形成過程をたどつていけば明らかなように、「ウージェニー・グランデ」のグランデ親父も、「ゴリオ爺さん」も、ゴブセックという高利貸も、それぞれ個性のはつきりしたブルジョアといえよう。だが、こうした前半期の作品群の一方には、後期の作品群「従妹ベット」のクルヴェルや「従兄ボンス」に属するブルジョアも重要な人間像である。これらさまざまなブルジョア小説があるのに、なぜ「セザール・ピロトオ」を選ぶのか？

その理由は、この小説がほかのどの作品よりも、ブルジョアの繁栄と没落という社会過程に主題の焦点をあてているからだ。いいかえるとバルザックは大革命以後、豊かな社会勢力となつた上昇期ブルジョア階級の人間群像に光りをあてながら、たんに貴族対ブルジョアの対立関係を描いたのではなく、さらに上昇期のブルジョア階

級は、一八三七年の完成作であり、これと同時に平行して書かれた「幻滅」とともに、栄枯盛衰という人間の生涯の両極点に物語の大筋をあてている。もつとも、人生の浮き沈みという主題は、バルザックの生きた変動期——一七九九年から一八五十年のあいだに、何度政体の変遷があつたかを想いだしていただきたい——の特徴的な性格ではあつたが、この二つの小説以前には、なお家庭内部の私生活扱つたものが多かつたのである。その意味で、この時期以後の作品に著しい社会性・階級性の表現を決定的に方向づけたのが、「セザール・ピロトオ」である。

第三に、バルザック以後のブルジョア小説は、「ボヴァリー夫人」や「ブーバルとペキュシェ」やゾラの小説がその好い例であるように暗く、しめつばい。「ボヴァリー夫人」では、薬屋オメーが勲章をもらつたところで、その小説は終つているのに、「セザール・ピロトオ」は、香科商人が勲章をもらい金儲けをもくろむところか

ら、始まつている。これは大きな発想の差異だ。たしかに、ブルジョアの上昇力を幼いときから体験していたバルザックは、上昇期のブルジョア階級をえがくにふさわしい条件を生きたといえるのだが、われわれの問題はそれだけにとどまらない。

以上の三つの理由を前提にして、この研究で考えたいのは、つぎの三つの問題である。バルザックは、ブルジョア社会のなかで生き、その社会に対決していきながら、どのように社会を表現しているか——レアリストの性格。盛衰の物語である「セザール・ピロト」の基本的調子は、喜劇性から悲劇性への移りかわりではないか——さいごに、バルザックの批判精神は、この小説でいかなる意味をもっているのか。

(一) レアリストの性格

「セザール・ピロトオの栄枯盛衰」は、大革命から王政復古までを時代背景にしている。こうした歴史の現実（アクチュアリテ）とこの小説の現実性（レアリテ）とを比較すれば、どうなるであろうか。この四十年にわたる時期の経済史的な特色は、旧体制下の封建制が大革命によって廃止されたのち、古い農業生産様式を排除しようとする資本主義生産力が急激に動き始めている過程にある。すなわち原始的資本蓄積を中心にして、手工業的生産や問屋制家内工業と平行して、分割地的な小農的な農業経営がおこなわれている。古い生産過程。この生産関係をうちやぶるうとして出現したのが、機械の発明・技術の進歩・ジャーナリズムの発達という産業革命の巨大なうねりである。封建遺制のなごりをとどめる古い生産関係と資本主義をつくりだす産業革命の細波とがあい争っている点から、

この時期は、なごり渡り。ブルジョア社会といえよう。この細波を巨大なうねりに変えるものはなにか？ 本格的ブルジョア社会の成立を示すモメントはなにか？ それは、金融資本の性格——銀行家ほどの程度まで生産関係の網に入りこみ、その網をひきしほっているかにかかわっている。王政復古期からルイ・フィリップ時代への政治過程は、いわば、フランスの政治を銀行家の掌中におく動きであつた。つまり王政復古期は、フランス資本主義成長のあらゆる条件を稔らせていたのである。

こうした時代変遷は、いかに描かれたか。この小説は三つの世代を区分して表現しつつ、異つた歴史的情况をはつきりさしめしている。

- (1) 大革命以前のブルジョア。
- (2) ナポレオン帝政から王政復古期にかけて繁栄するブルジョア。
- (3) 王政復古以後とくに、ルイ・フィリップ時代に華々しく活躍するブルジョア。

こうしたブルジョア三世代の根ぶかい差異は、それぞれの時代の矛盾をふくむ典型的な差異であつて、それぞれの世代間の対立が、歴史の動きをつくり、したがつて小説の大きい筋を必然的なものにする。具体的にのべれば、(1)の世代は旧体制からの脱却をのぞましい保守的ブルジョアである。たとえば、香料商ラゴンは、ルイ王朝と貴族階級の御用をつとめた過去の商人だ。彼は、そうした取引関係からも王党派であつたから、ブリュメール・一八日にナポレオンの出現があつてからは、商売から身をひき、番頭のピロトオに店を譲る。

(2)の世代は、国有財産の売買やいろいろな投機などに手をだして、

財産をふとらせた大革命の世代であり、王政復古期に繁昌のきわみに達する連中である。その典型が、この小説の主人公セザール・ピロトオにはかならない。先代のラゴン老人から「バラの女王」という店ののれんと昔からの得意先をうけつたこの香料商人は、王政復古という時代の要請もあつて、王党派であるうえに、親方対徒弟という家内工業の身分関係をまもりつづけている。だがこの旧体制的な古めかしさのほかに、彼は先代のラゴンとはうつつて変つた新しい側面がある。

大革命は封建制をうちくだし、ブルジョア階級の政治的抬頭を可能にした。セザールはパリのとある区の助役になつた。と同時に上流社会にも顔を出したい出世欲が彼をとらえる。また、大革命以後ふえてきた、商品の流通関係にこたえるため、彼は安い化粧品を二三發明した。さらに、それを色刷りの宣伝ビラでフランス全土に普及もする。これは商才にたけた若々しいブルジョアの姿である。この点について、バルザックは「倉庫が品物でいっぱいときは売る必要がある。売るためには、買手の氣をそらねばならない。そうしたわけから、中世には看板が、今日（王政復古期）では、ビラが生まれた」（ヌチンゲン商会）と風俗史的というより社会経済史的な見解をのべている。つまり、ラゴンが生き活躍した旧体制下では、「バラの女王」の看板が大変はぶりをきかしていたが、大革命後の新しい世界では、宣伝ビラが、ばらまかれたのである。（そこには商業宣伝やP・Rのメディアの変遷によつて表わされた時代相の変化がみとめられる。）

(3)の世代は一八三〇年のルイ・フィリップ即位以来、社会的な優越をはこる本格的ブルジョアである。たとえばポピノ青年はセザール

ルの店からのれんをわけもらひ、支店をいとなむのだが、もはや香料商ではない。ポピノ商会という、れつきとした薬局の主人と交つている。ポピノは第二の世代のピロトオの悟りえぬ新聞広告の効果に目をつけ、その広い宣伝力でもって販路をひろげる一方では、注文取りを田舎におくりこんで販売網をひろげている。先代のピロトオは、こうしたマス・メディアの浸透力と果敢な商策とを理解できなかつた。そこにセザールが没落しなければならぬ時代的制約があつたのだ。その反面ポピノ商会の発展に寄与した新聞記者フィノールと注文取りゴディサルとの二人は、陽気な人物で、後述の喜劇性に色をそえる役割をもっているのだが、彼らは、今日の新聞における広告や商業界のセールス・マンなどの役目を考えるものには、その先驅形態として興味の対象になる人物といえよう。

さらに、この第三の世代には、ヌチンゲンなどの銀行家が属している。彼らは資本主義の推進者であつて、重要な人物だ。彼らは貴族階級のみならず、ほかのブルジョアたちをむきぱりくう「山猫」として「人間喜劇」のいたるところに、とりわけ、この小説に出現する。というのは、ベレソールやフラールはじめ多くのバルザック研究家が、この小説を破産の小説とする見解をみれば一面的にあきらかであるように、投機と破産をめぐるブルジョアの動向が、小説の一つの筋となつているからだ。だが、綿密に考えるならば、土地の投機と破産は、商業ブルジョアには、その破滅の原因とはなるが、金融ブルジョアには高利貸資本とともに、原始的資本蓄積の手段である。具体的にいえば、セザール・ピロトオには土地の投機がたしかな、ばる儲けの口と見え、彼はこの投機で百万フランの利益をみこみ、小売店をやめて、卸商人にのしあがるはらであつた。そ

して、この投機のはなしに、第一の世代のラゴンなど古風なブルジョワがひじょうに乘氣になつてゐる。こうしてセザールたちが儲けを期待して元金を払いこんでいくうちに、公証人のロガンが資金をもち逃げしてしまふ。しかし、実のところは、土地の投機も、このもち逃げ事件もすべては、銀行家ティエがしくんだ架空の事件なのだ。が、そうした手のうちは、商業ブルジョアには雲をつかむように全くつかめない。事実、当時の銀行家たちは架空の投機事件でつちあげ、商業ブルジョアたちの利害欲に乗じて、彼らの貯えた小金をひとまとめにかき集めていた。そして、この投機師の射倖心は当時の銀行家に支配的であつたことに注目しておこう。

銀行家たちが小資本を収奪し、もつと大きな産業に投資することの過程ははかならぬ商業ブルジョアが破産してプロレタリア化してゆく側面をふくんでいる。この状況を要約するかのうちに、小説のなかで「思いがけない事件は庄搾機のネジだ。おれたちは、ぶどうさ。だが銀行家は樽だらうな。」と銀行家にうまい汁をすわれた商人がのべている。まつたくこの王政復古期から、銀行家たちは、中小企業の利潤はもとより、交通業から重工業にいたる諸産業の資本をじぶんのものにしようとしていたのだ。

登場人物は、上述の経済・社会のしくみとからまつて情熱の体現者として表現されている。ここでは人物の情熱的側面として、セザールの成功欲と銀行家ティエの憎悪の二つをとくに指摘しておきたい。セザールは貧しい百姓の子から香料商にまで立身したのだが、単純で実直で努力家肌のこの男の望みは、上層ブルジョアとなり、パリの豪商の一つに数えられ、政治家になることだ。そのために投機で大儲けをはかつた。こうした上昇欲はきわめて自然であつて、

社会階層を下から上へのぼつてゆく野心は上昇期ブルジョアのエネルギーの表現にはかならない。

ティエはもともとセザールの店の手代であつたが、主人の妻に云いよつてはねつけられ、さらに帳場の金をふところにしたので店をおわたした。だが、出世して銀行家となつたのちも、若き日の重なる恨みを忘れない。恩を仇で報いようと考えたうえで、この銀行家は投機をでつちあげたわけである。憎しみの権化と成功欲の化身という二つの人間像は、それぞれ金融ブルジョアと商業ブルジョアという二つの階層のもつ性格の体現であつて、バルザックの小説人物には、二重のふくみがあるといわなければならない。定式的にいえばバルザックは、一人の人物のうちに、心理的情熱的側面——性格・容姿と社会的・経済的側面——階級・地域などを結びあわせて描き、さらにこの総体的人間像をたくさん登場させて、そのあいだの対立と矛盾をあばき、レアリストの歴史像をつくらうとしたのである。そう考えてくると、クルチウスのように、バルザック人物における情熱のみを強調するのは、かたておちだといえないだろうか。

(二) 喜劇性から悲劇性へ

小説の書き出しに始まる喜劇的な調子が、第一部を支配している真夜中に眼をさましたビロトオ夫人は、寝ているはずの夫の姿が見えないのに気づく。恐怖の念におそわれた夫人は、大声で夫セザールを呼ぶ。と、こちらはこんどの受勲を祝う舞踏会にそなえて、物差し片手に、部屋の改造を思案している。この冒頭部は「フィガロの結婚」の書き出しに通ずるものだが、その部分の夫婦の対話は、モリエールばりの巧みさと機智があふれているといえる。

小説の喜劇性をつくっているのは、登場人物の性格と動作である。すでにのべたごとく、この小説の人物はほとんどブルジョアである。いはば、バルザックは上昇期ブルジョアのもっている自信、自分の勢力への確信をもとにして、ブルジョア喜劇をあみだそうとしているのだ。少々へのまをしでかしても自信をもちえたフィガロが、悲しみを笑いふきとばすことができたように、この小説でも、前途洋々たるブルジョアたちは、檯舞台に初登場した喜劇役者のように、ポーズをとつたり、いかめしい物腰になつたりする。たとえば、セザールは、自分が何か面白い考えを述べたな気がつくと、自分の主張を強調するかのように、かがとを軽くあげてドスンと落とす妙な癖をもっている。そうした奇癖だけでなく彼の得意はきまり文句をはくことだ。たとえば、

「国土の自由恢復のお祝いとレデオ・ドヌール勳章拝受の祝いをかねまして、友人をあつめ、宴会をひらきたいと存じます。」

という言葉である。なるほど、この文句じたいには、どんな喜劇的なひびきもない。むしろ真面目な挨拶にすぎない。たとえば、かの名だかいアンリ・モニエの人物ジョゼフ・プリュドムの紋きり型のせりふをおもいおこせば、その調子の差異は一目瞭然であろう。だが、この小説の前半部で、この文句は七度くりかえされる。セザールは友人・先輩・知人にあうたびに、この文句をつげるのだ。一つの小説で七度くりかえされた文句は、当然ステレオタイプ化する。そしてステレオタイプの文句は喜劇的效果を読むものに与えずにおかしい。

セザールの奇癖ときまり文句とが重なりあうと、彼の行動は「情況のコミック」(ベルグソン)となる。この喜劇性は、豪快な注文

とリゴディサールの人物像によつてさらに調子を強められる。もつとも、ゴディサールの喜劇性はヴォードヴィルのなものと属するけれども。

セザールの性格は正直と誠実であつた。王政復古期に大商人になるくらいのも、時流を見ぬく商才もあつた。こうした性格は上昇期ブルジョアのエネルギーによつて太い筋を通されている。この特徴を描いてゆくことで、バルザックはセザールを底の底まで喜劇的な人物に描いてはいない。むしろセザールは、コメディ・セリュウズの人物といえるのだ。この点をなお詳しく説明したい。

デイドロは、十八世紀のブルジョア階層を描こうとして、古典悲劇と古典喜劇のあいだの中間ジャンルをつくらうとした。このバルザックの先輩は、十八世紀演劇を分類しているが、それを要約すると、

(A) コメディ・ゲー「タルチュフ」のように、滑稽さと悪徳をえがく)

(B) コメディ・セリュウズ「一家の父」のように美德と義務を強調する)

(C) 家庭悲劇(家庭の不幸を描こうとする新様式)

(D) 英雄悲劇(古典悲劇のように英雄の不幸や国家の運命を描く) この分類原理を「セザール・ピロトオ」に適用すれば、人物のおかしさを強調したという点でゴディサールはコメディ・ゲーの人物だが、セザールはコメディ・セリュウズの系譜にたつた人物と考えられる。デイドロも主張したように、真面目で誠実な人物が同時に喜劇的なしぐさをすれば、二つの人物特徴があい接するわけで、当然コミックな特徴は弱められ、うすめられ悲喜劇的になる。

このような第一部の喜劇的特色はセザールの舞踏会の終りとともにしだいに影をひそめ、第二部のはじめ、セザールが破産を感じ、あたりから悲劇性がつよまってくる。王党派のセザールが投機的なにかかつて失敗し、舞踏会の費用のうめあわせもできず、ついに時の財界の大御所ケラー兄弟や大銀行家マチンゲンのもとをつぎつぎとおとつれ、融資を数願するくだりは、悲惨なセザールの姿がはつきりと描かれている。持たざるものと持てるもの、王党派と自由派との対立を背景にして破産寸前のセザールが自由派の銀行家たちとにさんざん愚弄されるのだ。

セザール一家が破産の宣告をうけ、さらに権利と名誉を回復しようとして賃仕事に精だす結末の部分、さらに肉体労働がたたつて、権利回復のとたんにあの世に送られるセザール。それは、「人間喜劇」のいたるところにあるブルジョワ社会の悲劇面である。「私の小説の多くはブルジョワ悲劇だ」というバルザックの反省をここで思いだす必要があろう。バルザックの悲劇的人物とは、個人の力ではいかんともしがたい時代の動きと制約をうちやぶろうとして失敗する人物であり、歴史の、したがって「人間喜劇」の世界から去つてゆく人物なのだ。それは「幻滅」の世界とも云える。

しかし、この悲劇性や幻滅性が人物の行動を全面的に包んでいるのではない。バルザックは人間を、Xは喜劇的人物、Yは悲劇的人物といったような類型的な視点では捉えない。前述の分類をつかえば、(A)モリエールの古典喜劇とか、(B)コルネイユなどの古典悲劇を否定したうえで、バルザックは喜劇的でもあり悲劇的でもある人物を創造するのだ。これは画期的な新しい人間観である。なぜならば、古典劇が人間を安定的で固定的な性格中心のドラマとして描いたの

に対して、バルザック小説は人間とその情況との典型的関係を重視する立場から、情況の差異によつて人間の行動の意味が多様に変化する様相をとらえているのだから。そしてこの悲喜劇的な人間観は典型小説という近代的形式によつてのみ始めて作品化されたのである。(スタンダールやディッケンズとの比較)

(三) 道徳と批判

バルザックがこの小説で共感をよせている人物は、政治色のいかん、世代のいかんを問わず、信仰あついキリスト教徒である。たとえばセザールの伯父ピュローは共和派でキリスト教徒であり、ポピノ青年は原始キリスト教徒の美德を奉じている。破産したセザールが不幸な毎日をおくりながらも屈服しなかつたのは、その信仰心のあつさによるとバルザックは断つてゐる。彼ら商業ブルジョワは善良な人柄で、ときに馬鹿正直ですらある。それとは逆に、偽善家・どろぼうとして描かれているのが銀行家と高利貸しである。バルザックの批判精神は金融ブルジョアの邪悪さ・ずるさにたいしては、いささかも容赦しない。「もし、ぼくたちの最初の友人が、最初のいい鴨でないとすれば、ほかにはもう鴨なんて見つかりやしないさ。」と銀行家ディエは云う。同じ銀行家仲間でも、むしろ仲間だからこそというべきだろうか、狼と狼のような人間関係のあることをバルザックは注目しているのである。

スタンダールはお人好しの老銀行家をさつと描いただけにとどまつた。しかしバルザックは醜いものの見本のように銀行家をとがめだてている。なるほど彼の銀行家批判の拠りどころは、セザールたちの人物にうかがえる、古い家父長制的な純朴さであり、キリスト

教信仰に根をおろす善良さである。これらはバルザックがたたえつけた道徳だ。バルザックの価値体系の構成要素だ。だが、彼は、こうした個人的な好みや主観だけによつてどんな人間をも裁かない、社会を批判しない。裁くまえに人間を愛し、批判するまえに社会のしくみを理解しようとした。もしこういう言葉が許されるなら、正しく愛し、まちがひなく批判しようとして具体的に人間と社会を観察することからバルザックは始めたのだ。それは作家における客観的・具体的ヒューマニズムへの志向である。

たとえば、結末のつけ方を考えてみると、共感的人物セザールを一旦は破産の底から救いだすが、たちまち病氣ということて死なすというまわりくどい方法がとられている。この場合、バルザックが名誉回復というつぐないをセザールにあたえず、セザールの美徳をはめたたえず、「商業的誠実の殉教者」などと讃辞をおくらないで、むしろ、銀行家たちの横暴と高利貸のずるさを描いたとすれば、どうであろうか？ 事実としては、王政復古期のころ、破産からの失権回復はごくまれであつたし、大部分のブルジョアは無神論者でないにしてもコンフォルミスト的になる傾向があつたのだ。したがつて大団円のおさめ方は、個人的な、まれな情況にセザールという人物を設定して、一応は、人物の美徳のあかしをたてているので、その点では、バルザックは、主観性を介入させてはいるが、究極的には、ブルジョアの非キリスト教化およびブルジョア階級の内部分裂という大勢についているといえるだろう。

むすび

「人間のみならず、人生の主要な事件は、タイプによつてかたち

づくられている。どんな存在のうちにも自らを描きだす情況——つまり典型的側面があるものだ。それこそ、私が探究のかぎりをつくした正確さの一つである。」

バルザックは「人間喜劇」の序文でそう記している。さらに彼は、歴史の動きが主人公であり、私はその歩みをするす書記にすぎないと自認している。個人の勝手きままな主観よりも、できるだけ客観世界の主体性を重視した作家であつた。とはいつても、事実の世界を分析し綜合していく創作の過程には、外界と人間観との統一がたえず行われねばならなかつたから、典型的情況と典型的人物との有機的な関連でのみ、作品の創造は可能であつた。

この創作精神を中心にしてかかれた「人間喜劇」の「セザール・ピロトオ」の特徴をまとめておこう。第一に、過渡期ブルジョア社会である王政復古期を背景において、ブルジョアの興隆と没落という典型的側面を描いた点。しかも貴族対ブルジョアという階級対立の様相をではなく、さらに細かく具体的にブルジョア階級内部の多様性をとらえて、銀行家対商業ブルジョアの争いとして表現している点は、「人間喜劇」のなかでも独自な小説構成といえよう。

それだけでなく、上昇期ブルジョアのエネルギーを背景に数々の喜劇的人物をえがきつつも、結局さいごには、セザールの破産と死という典型的側面を表すことで、ブルジョア社会の悲劇性をばくろした。

第三に、こうしたレアリスムの方法はバルザックの批判精神にささえられていること。バルザックは資本主義社会の山猫たる金融ブルジョアをするどく批判し、「人間が人間にとつて狼である」社会のなかで、どんな犠牲者がでなければならぬかを、どんな作家よ

りも深くあはきだしたのである。「世の栄達をあがめ、手段をえらばぬ成功をたつとぶ一連の社会組織のまえには、正義の力がどんなに無力であるかを、金の力のみに基礎をおく社会に思いしらせ、そしておじけづかせることを、私はせつに望んでいる。」と「セザール・ピロトール」から五年のちに「泥かき女」の序文はのべている。こうして、バルザックにあつては、社会批判とリアリズムはたえず、結びあわさろうとしたのである。客観世界の法則をもとめ、それにつとめて「人間喜劇」のしくみをつくり、そのなかで、社会批判をこころみ、いかに社会のなかで人間が自己疎外してゆくかを具体的に、表現することこそ、バルザックの小説の目標なのである。